

精神分裂病における言語性幻聴の消失過程:
その自己所属性、自主性を中心にした精神病理学的
研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/15212

学位授与番号	医博乙第1283号
学位授与年月日	平成6年3月16日
氏名	本田 徹
学位論文題目	精神分裂病における言語性幻聴の消失過程 — その自己所属性, 自生性を中心にした精神病理学的研究 —
論文審査委員	主査 教授 山口 成良 副査 教授 高守 正治 教授 山下 純宏

内容の要旨および審査の結果の要旨

これまでの精神分裂病に関する精神病理学的研究は、その発病過程や本質論に多くの力を注いで来た印象がある。しかし、今日の薬物療法の発展がもたらした医療状況においては、精神分裂病患者は増悪と寛解を繰り返すことが多く、その疾病の推移についてのより詳細な知識が臨床的に求められている。

それで、本研究では、アメリカ精神医学会のDSM-III-Rによって精神分裂病と診断され、その経過中に言語性幻聴の消失が確認された17名（男性7名、女性10名）について、その幻聴の消失過程を観察し、精神病理学的検討を加えた。対象の平均発症年齢は 24.6 ± 9.0 (SD) 歳、観察開始時の平均年齢は 28.1 ± 9.2 (SD) 歳であった。

方法として、幻聴という現象が持つ要素を、1) 強度、2) 出現頻度、3) 局在性、4) 声の主、5) 内容、6) 要素幻覚、7) 出現状況、8) 明瞭度、9) 自己所属性、10) 自生性、11) 病識の項目に分け、それぞれの推移について検討した。幻聴に対する自己所属性（関係性）についての、言語化、意識化の量的な差を指標に、I型、II型、III型の3種類に分類した。I型は最も言語化意識化のレベルが高いもの、III型は最もそれが低いものであり、II型はその中間的に位置するものとした。

その結果、I型を中心にして得られた病的体験の変化を基にして、上述の幻聴の要素項目についてみると、局在性は自己にとって遠位から近位へ、外から内へと変位するのが一般的に見られた。声の主の変化は自己にとって疎遠で迫害的な他者（無名の迫害者や神）から、身近で親密な他者（看護婦、家族等）へと変化し、幻聴の内容も徐々にその迫害性、命令性を減じ、それに連れて支持的で励ましに満ちた内容に変わっていく傾向が認められた。幻聴の自己所属性に関しては、幻聴は自己に属するもの、つまり思考化声やその近縁のものへと変化し、またその知覚的性格を失って、自生体験、自生思考へと置き換わり推移してゆくの観察された。さらに言語性幻聴が消失した後に、「耳鳴り」と表現される機械音や要素幻覚がかなりの症例に見られ、それらは幻聴の変位形式の一部と見なされた。

以上のような項目毎の推移を時間的経過にそってまとめてみると、幻聴の消失過程は、1) 第1期（減衰期）：幻聴の頻度、強度が低下し、声の主もより耐え易い他者によって変っていく時期；2) 第2期（混在期）：思考化声と自生思考が混在する時期；第3期（自生体験期）：幻覚体験はさらに微弱で稀となり、自生思考等が活発に見られる時期；第4期（解消期）自生体験も減少し、時に豊富な回想が出現する時期、の4つの病相期に定式化することが出来た。

これらの幻聴消失についての類型化と定式化について、これまでの精神病理学的見解と対比し検討し、思考（あるいは表象）と幻覚（あるいは知覚）とが相互に緊密な関係にあるとの考えが精神病理学的にはより有効であるとの見解を提示した。

以上、本研究は、精神分裂病の幻聴の消失過程を精神病理学的に考究し、新たに3類型と4病相期を定式化することによって、その病的現象の理解を深めたものであり、臨床精神医学に寄与する労作と評価された。